

戦後に呼び起こされる戦中意識

—太宰治「パンドラの匣」論

View of life and death during the war remind after the war
—”Pandoranohako” Osamu Dazai

坂上 幸

Miyuki Sakaue

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 博士後期課程

キーワード：戦後，戦中，手紙

Key words : After the war, During the war, Letter

1. 研究目的

太宰治「パンドラの匣」は、1945年10月22日から翌年1月7日まで64回にわたって仙台の地方紙『河北新報』に連載された。戦中から結核を患って余計者意識に苛まれていた「僕」は、終戦を契機に「健康道場」と称される風変わりな結核療養所に入所する。その「僕」が療養所外部の友人「君」に宛てて終戦直後における療養生活を明るく報告する書簡体小説である。

従来の先行研究において注目されてきたのは、戦後にそぐわない戦中の天皇観や死生観である。戦中に脱稿されたが出版間際に焼失した「雲雀の声」の校正刷をもとに、終戦直後に書き改められて「パンドラの匣」は成立した。そのため、作品に通底する明るさや戦中の表現は、戦後になってから改稿を加えた際に引き継がれた言説とみなされ、戦中の太宰作品との類似が指摘されてきた。一方で、「天皇陛下万歳！」という言説は、戦後における太宰の思想表明として解釈されてきた。

だが、手紙を綴る「僕」は作者太宰と同一人物ではない。『健康道場』と称する或る療養所で病ひと闘つてゐる二十歳の男の子から、その親友に宛てた手紙」と作者太宰が「小説予告」（『河北新報』1945年10月20日）で説明している。さらに、戦後にそぐわないとみなされてきた戦中の表現は、終戦直後に手紙を綴る「僕」がその時点から想起した言説として解釈しなければならない。物語内部で「僕」が書き綴った全13通の手紙の日付は、1945年8月25日から同年12月9日までである。

これは玉音放送の10日からアメリカ軍の進駐開始を経て、戦後民主主義が唱えられるようになるまでの期間にあたる。

それでは、終戦直後を結核療養所で過ごす「僕」は、戦中の死生観や天皇観を呼び起こしながら、戦後に向かって如何なる心境で生きようとしていたのだろうか。戦中の死生観に基づいて超越した存在に身を任せていた「僕」が戦後を主体的に生きようと歩き出すまでの道程を明らかにすることを目指した。

2. 研究実施内容

本研究では、「僕」の心境の変化を明らかにするために、船の航海を夢想する言説を、その手紙の日付に基づいて当時の時代状況と対照させながら順にたどった。

まず、1945年8月25日付の第1の手紙において、「僕」は終戦直後の心境を船の出帆になぞらえて語っていた。「あの日」に耳にした「天来の御声」を玉音放送で耳にした天皇の声ととらえると、「新しい大きな船」に乗せられて「天の潮路のまにまに素直に進んでゐる」という「僕」の夢想は、天皇に命じられるままに新たな戦後を進んでいく心境を表象していると解釈できる。しかし、玉音放送で告げられたのは、戦中からの継続を意味する国体護持であった。それを「新しい」と表現しているのは、戦中に結核患者としての余計者意識に苛まれて死を急いでいた「僕」が終戦を「ちがふ男」に生まれ変わった転換点ととらえたためであ

った。結核患者の「僕」にとっての戦後は天皇からの要請に従うことで開始された。

一方で、佐藤秀明『『パンドラの匣』の『民衆』』（『太宰治研究 23』2015年6月）の「キリスト教的な語彙でも記されることで、より普遍的な超越的存在を指している」という指摘を考慮すれば、第1の手紙で語られている「新造の大きい船」に乗せられて「天の潮路」を進むという表現からは、ノアが神の命に従って造った箱舟に入って天高くに浮かぶ、いわゆる「ノアの箱舟」の物語をも想起できた。「僕」が戦後へ向かう心境とノアの振る舞いにおける共通点は、超越した存在の命に従って生きようとする受動的な態度にある。9月8日付の第4の手紙でも冒頭で「あたらしい男」と称した「僕」は「生きて遊ぶ資格を尊いお方からいただいている」と語り、超越した存在から与えられた生を生きようとしていた。その直後に同様の境遇にあった結核患者の死に直面した「僕」は、天皇に命を捧げる戦中の死生観を想起し、決死の航海を信じようとしている。一方、「僕」を含む「生者」が乗せられた「天意の船」は、新たな世界へ命を繋ぐ箱舟を彷彿とさせる。したがって、「僕」は戦中の死生観に基づく航海を信じながらも、新たな戦後へ向けて超越した存在に与えられた生を生きようとしていた。

次に、物語後半における「僕」の心境の変化を分析した。10月14日付の第10の手紙で越後獅子が時節に反抗する「自由思想」としての保守派を主張した時期は、GHQが民主化政策の一環として選挙法改正を要求し、政府が参政権の対象者を拡大する方針を定めた時期と重なる。この選挙法改正によって20歳の「僕」は初めて参政権を得ることになった。10月29日付の第12の手紙では、占領下に順応していく「君」と、創作意欲を取り戻した越後獅子に触発されて主体的に病を治して生きようと焦った「僕」は、戦中の死生観に基づく天皇に身をゆだねて航海してきた「天の潮路」を「のろくさく」感じている。

最後の第13の手紙は、一つ前の第12の手紙を綴ってから1ヶ月以上先の12月9日に綴られている。この間に自発的に健康になりたいと焦りながら鍛錬を続けた「僕」は、4ヶ月ぶりに「健康道場」の外に出た。太平洋戦争の開戦日の翌日にあたる12月9日の手紙にみられる「新造の大きな船」は4年前の開戦日に回帰するものではなく、新たな戦後へ向かって進んでいくものとして語られて

いる。それは女性のマア坊も「僕たちの仲間」として受け入れられ、共に「天の潮路」を進むと語られているためである。この言説の背景には、10月11日にGHQから婦人解放が要求されていたことが関係している。

また、「新造の大きな船」という表現は、第1の手紙と同様に、ノアが神に命じられたとおりに造った船を彷彿とさせる。ノアが従う神とも重なる、超越した存在としての天皇は、「僕」が語る12月9日の時点では存在していた。だが、この第13の手紙の冒頭が掲載された1946年1月1日に、天皇はいわゆる「人間宣言」を行う。それを見据えているかのように、「僕」は第4の手紙で超越した存在から与えられた生を生きる者として規定した「新しい男の看板」を捨てた。このようにして、「僕」は受動的に生きようとする姿勢からも脱却した。

そして、最後の手紙の末尾で「あとはもう何も言はず、早くもなく、おそくもなく、極めてあたりまへの歩調でまっすぐに歩いて行こう」と、超越した存在が不在となった戦後を主体的に歩んでいこうとする姿勢を表明していた。

3. まとめと今後の課題

船にまつわる言説を手紙が綴られたとされる当時の時代状況と、いわゆる「ノアの箱舟」の物語と対照させることで、手紙を綴る「僕」の心境の変化をたどった。第1の手紙で玉音放送を耳にしたことを契機に天皇の要請に従う姿勢を綴った

「僕」は、小説前半では超越した存在に従って生きる受動的な態度を貫いていた。だが、10月以降に綴られた小説後半においては、GHQが要求した民主主義政策に対応するかのようになり、自ら病を治そうと焦り始めた。そして、最後の手紙の末尾では超越した存在が不在となった戦後を主体的に歩もうとする姿勢を綴っていた。このように、小説「パンドラの匣」とは、超越した存在に身を任せ、「僕」が戦後を主体的に生きようと歩き出すまでの物語であることが明らかになった。

4. この助成による発表論文等

①雑誌論文

[1]坂上幸「終戦直後に進む『船』をめぐって—太宰治『パンドラの匣』論『大妻国文』査読有り 第53号 2022年 203頁～221頁